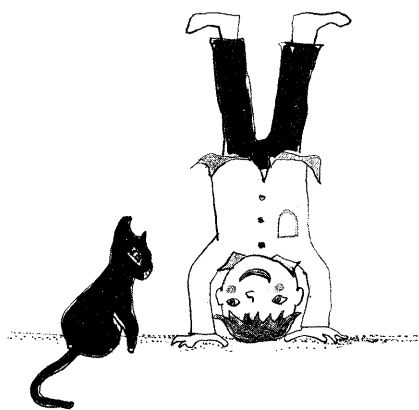


# 手紙

松井 とし



県の行政改革のあおりを受け、幼稚園が廃園されることになった。「廃園」の足音はつきりと聞こえ始めた昨年、修了生から来た年賀状に出す返事の中でその事に触れた。ただ一人中学生のI子から折り返し手紙が届いた。「なぜなのか、うさぎたちや先生たちはどうなるか」と書いてあった。私は報道された新聞の切り抜きを同封し、「疑問に思うことをうやむやにせずに、追究する姿勢はとても大切だと思う。また、心配してくれたことがとても嬉しかった」と返事を送った。

現代社会を生きる日々、おかしいと思うことや、納得のいかないことに数多く出会う。環境破壊に反対する住民運動も、その第一歩は素朴な疑問や小さな行為から始まるのだろ

う。しかし、今の私にはそのエネルギーがない。そればかりか手紙を書くことさえ重荷になって親しい人たちとも疎遠になりつつある。I子の手紙によって、慌しさに流されて生きる私の生きざまを反省させられた。

I子には、年少児だったころにも大切なことを教えられた記憶がある。秋も深まったある日、I子は一人空箱製作に熱中していた。しばらくして「噴水を作りたい」と砂場にした私を呼びに来た。部屋へ戻ると、アイスクリームの丸い容器の中に水の出るところがつけてある。噴き上げる美しい水の動きをどうやって表すか、一緒にあれこれ考えたのち私はモールを取り出した。I子は喜び「先生、今日っていい日だね」と弾んだ声で言った。登園の途中、坂の上から真白く大きな富士山が見えたとし、噴水も出来たからだと言う。このひとは、自然を友に充実感をもって生きる幸せを私に気づかせてくれたのだった。いよいよ幼稚園は、この三月で四十一年の歴史を閉じる。今年の年賀状では、多くの修了生や父母からメッセージが届いた。「楽しかった日々幼稚園で学んだことは、いつまでも心の中に残ります」この言葉は私の心の中で深い共感をもってこだまする。

若い人たちによって人間性を磨かれた私の十五年間は、かけがえない宝ものとして残っている。

(神奈川県立教育センター)